

空

平成25年2月20日発行

第11巻1号

通巻第47号

空



2013・2

SORA 47号

木 枯

柴 田 佐知子

稲すずめ稲に溺れてゐたりけり
産神や椎の実落つる昼も夜も
虫籠を置きて廊下の暗くなる
踏ん張つて脚が真直ぐ茄子の馬
母はもう手の届かざる吊し柿
収まりのつかぬ姿に鴉の贅
秋草をねぢり取りたる牛の舌
鹿を追ふ話鹿笛吹きながら
莫塵の跡滲んでゐたる夕花野

一と夜経て老い俄かなる菊人形

秋風や昔どこでも釘を打ち

何してもつまらなき日や種茄子

蠅螂はすぐに怒りぬ怒らする

白壁の光も容れて胡麻筵

名月やもう歩めざる父を撫で

臥す父の向き幾たびも変へて秋

銀漢や眠るのみなる父の日々

ゆく秋の炎に父をあづけたる

如来まで花野の道の伸びにけり

九十の母と夜露にのこされし

よく晴れてどこか揺れゐる蕎麦の花

磧ごと広がってゆく鯉の河

冬の鳥
高倉 和子

初みくじ青空揺らすほど結ぶ

宝船片足かけて乗り込みぬ

ゆつくりと父の起ちたる二日かな

水餅やむかしの家は暗かりし

連山の端のうやむや冬紅葉

手袋の小指はいつも余りたる

寒鯉のぶつかりて水動きけり

夜に入る間合の空を冬の鳥

奥丹波
中田みなみ

舟倉の口ぽつかりと小春かな

神棚の伊勢へ向きたる冬はじめ

しぐるるや海老の寄り目に灯の点り

かの役者海豚で逝きしと言ひて食ぶ

豊漁も不漁も酒ぞ鱒起し

終点は海鳴りの駅冬銀河

紅灯のほかは凍てたる浜の町

ライターのポツと枯木を離れたる

茨の門 荒井千佐代

紙袋 服部早苗

海すでに闇となりたる焚火かな

立冬や鍋の中にも小さき鍋

ちちははがどこにもをらず竜の玉

ぬかるんでサルノコシカケまで遠し

煤逃げの水平線まであとすこし

長病みにフレームの灯の濃かりけり

道連れの相手わからぬ夢はじめ

鯛焼の温み病ひの慰みに

天国は茨の門や初寝覚

枯れもせず蠶螂冬を迎へたる

旗日なり規則正しく冬の波

生涯を一茶鬚肩や石露の花

朝よりの雨が氷雨となる逢瀬

雪の夜の雪女郎かも土不踏

大根干すところ大海原へ向け

枯草と枯蠶螂が紙袋

飯 盒 柴田志津子

松の内 だいじみどり

待つとなく門に佇む秋の暮

新玉の真竹そろへし井戸の蓋

二羽で来て共にとび立つ寒雀

首に巻く手拭を取り頬被り

飯盒は夫の青春山眠る

お飾りの縄解いてゆく針金も

触診の医師の目を見る冬はじめ

銀杏の灰汁の滲みたる手洗場

枝打ちの銜ひろがる山上湖

収穫の終りし葡萄棚ばかり

強情な牛の眇や寒夕焼

枯かづら引寄せてをる猿田彦

わが町の芯に寺苑の大冬木

桶仕舞ふ物置に射す冬の月

戸締りを説く警官に雪降り来

親として言ふべきは言ふ松の内

猪垣 野上

はるか
杏

風花や一枚岩の手水鉢

裸電球ひとつ拝殿冴返る

水面揺らさず寒鯉の反転す

漂ふも附かず離れず浮寝鴨

一輛車待つ無人駅枯るる中

猪垣の手厚きところ大根干す

うしろより北風が耳吹く除幕式

柘匂ふ神域の端の特攻碑



粕屋 吉 田 葎

牡蠣小屋やつかつかと来るハイヒール

海鼠言ふ開闢せしはこの前と

風花や天寿の骨の太々と

冬の朝身支度すれば筆筒鳴る

煮凝や兄弟寄れば母のごと

千葉 原 友 子

薔薇色の闇セーターを潜るとき

黄昏がうしろから来て落葉焚き

闇汁の箸を誰かに掴まるる

日の差して凍蝶すこし震へけり

瞑想にふければ冬の水となる

福岡 あさなが捷

天井に龍ののたうつ紅葉寺

自転車の前籠に菊あふれをり

神生れし大樹の前に焼芋屋

一日の長き糸糸をたぐり寄す

猫の子の何をされても眠たくて

福岡 矢野百合子

田仕舞ひの煙這ひをり伽藍堂

塔を得て真顔となりぬ寒鳥

礫の形に鴨の立ち上がる

枯枝に枯色すずめ来て囀す

岩穴に眼のごとき寒の水

糸島 小林 朱 夏

村人の一人一打や除夜の鐘

老僧が杖で払ひし恋の猫

鶯の声玄海へ流れけり

春愁ひ音出す玩具回しては

竜宮の玉の色なり桜鯛

粕屋 秋 千 晴

神馬まだ祭の飾り付けしまま

獅子舞の地下足袋のまま上がり来る

獅子舞の逆さ踊りに拍手沸く

クリスマスソングの中の仏具店

冬ざれの地下は工事の真つ只中

福岡 樋口 みのぶ

何もかも昔のことよ日向ぼこ

部屋中に猫の爪あと冴え返る

夢ひとつ加へし賀状太く書く

煤逃げの夫包丁を研いで来し

初写真娘ざかりの猫もゐて

福岡 亀井 紀子

干し柿を右に左に村を過ぐ

木の実撥ね猫の世界となりにけり

ポスターの左剥がれて憂国忌

少年は尖りて立てり十二月八日

独り言多き厨や十二月

第二回
「空賞」受賞作品

喜雨の雨

原 友子



正面の顔しか知らず福たるま

闘鶏の金剛の目が籠の中

穴を出し蛇に始業のチャイム鳴る

まんさくや鞋の型の一つきり

退屈を知らぬ仔豚や雪解どき

夕闇の翼大きく鳩浮巢

あたたかや尺貫法に換算し

おいしさうよやはらかさうよ春の雲

朝寝して身のどことなく透き通る

春風や年ごとに鍬重くなり

御七夜の赤子にとどく桜鯛

跡をはなびらにして蜥蜴攀づ

砂を吐くまで馬鹿貝の茹でられて

金魚ひるがへる患者の名が呼ばれ

父恋へば筋金入りの雄のこゑ

早き湯と早寝と喜雨の音のなか

今生を離れてなんぢやもんぢや咲く

熱の子のごとき西瓜を挽ぎ帰る

種芋の火照るを双手飲べり

空蟬の必死の脚の焦げ臭し

手の跡に一つづつ乗せ芋植うる

木洩れ日のまたもゆさぶる蟬の殻

種芋の余りを煮たる琥珀色

めんだうな数の未成りかぼちやかな

かぐはしき月を掲げて植田村

忘られて鉄に化けたる大南瓜

花菖蒲夜は古墳の闇が抱く

塗りむらの壁の親しき夏炉かな

飛魚のとんで夕日を跨ぎたり

境内に闇がどすと祭果つ

空作品評

柴田佐知子

夜に入る間合の空を冬の鳥

高倉 和子

「冬の鳥」は冬にだけ姿を見せる鳥というだけでなく、雀や鴉など年中いる鳥も言う。「寒禽」「寒雀」「寒鴉」「冬の鴉」といった言い方もある。食べ物がありそうにも思えない凍てついた道に降りたつて、餌を探して啄んでいる雀の姿などは、冬景色の象徴のように感じることがある。掲句はこの季節の寒気が際立つ夕暮を詠んだ作品。次第に光を失つてゆく空を「夜に入る間合の空」とは、まことに適切、且つ絶妙の表現である。夕空を飛ぶ鳥は、黒味を帯びて、影絵のように見える。切々たる命を感じる冬の鳥である。

豊漁も不漁も酒ぞ鯰起し

中田みなみ

雷は、季節ごとに多くの魅力的な名がつけられている。「鯰起し」もそのひとつ。北陸の鯰漁の頃に鳴る雷で、十一月から一月頃この雷が鯰を起す豊漁の兆しとされている。風雪を伴うこともある荒々しい雷である。冬波を割つて出てゆく鯰漁。終われば昼でも酒である。仕事帰りのサラリーマンの酒には

感じられない力に満ちている。「酒ぞ」と言い切った効果が鮮やかに決まっている。

親として言ふべきは言ふ松の内 だいじみどり

「松の内」は門松をたてておく期間で、地域によって元日から七日あるいは十五日まで。「松七日」「注連の内」とも言う。まだ正月気分たつぷりのときである。しかし「言ふべきは言ふ」みどりさんである。言われる方は屠蘇気分も吹っ飛ぶであろう。「松の内」がこのように読まれた作品は珍しい。季語の本意を逆手にとった面白さがある。

風花や天寿の骨の太々と

吉田 菫

骨揚げの折の作であろう。遺骨を「太々と」と描写しただけなのだが、悠々たる生涯を送られたのだろうと思われる。「天寿」「太々」という言葉によって呼び起こされる感懐であろうが、それを更に高めるのは回転された季語によるものと思う。晴れた青い空から舞い降りてくる「風花」。軽やかで明るい。亡くなった方が美しい空へ昇天されていくかのような印象が残る句である。亡くなったかたへの思いが季語に託されている。(以下略)

空集

柴田佐知子選



粕屋 吉田 葎

須恵 長 節子

鍛冶始まつ赤な音を放ちけり

千葉 原 友子

初晴や焼せんべいの醤油の香

古民家に昼の闇あり鏡餅

屠蘇散の糸がつつと注ぎ口に

猪除けの鬚低く吊り隠れ里

鮫鱈のひとかたまりのあやふやに

障子より灰色の海つづきけり

制服の二人冬野へ逸れにけり

霜柱踏んで恋には立ち入らず

寒紅を濃くして別れすんなりと

ことごとく父の訓へや星冴ゆる

謂れある地名消えゆく都鳥

送り盆終へて一族ちりぢりに

目に力みなぎる鱒の捌かるる

解り合ふ言葉探して梨を剥く

大空を覆ひつくして布団干す

唐辛子故郷の山へ逆さ吊り

山越えて来るおくんちの御強飯

水都大阪日の斑こぼせる都鳥

一呼吸遅れし返事夕しぐれ

糸屑を指に丸めて夜食とる

諍ひに割つて入りたる雪婆

京都 池田華甲